

りにつかへて悪しむざとたかきは見ぐるし、横は、たての長はよき比の七ッ筋の道具を置合せきあはず又ひろからず、よき比を寸法とする也、廣間臺子などは悪しきかつこう也、よく置合見て吟味あるべし、

〔貞要集 一上〕眞臺子之事

一臺子、長盆茶入、臺天目一莊、往昔有之候得ども、茶調様區々にして、茶道前不極處に、奈良の稱名院住僧珠光、臺子七莊にして、茶調様工夫鍛鍊して、東山義政公へ被召出於御前、茶道仕夫より代に臺子の茶湯弘り申也、紹鷗利休よりすこし替り有段々、奥に茶道前記す也、

一臺子の置様は、道具疊の向四寸餘五寸迄間を明ケ、左右は疊の眞中に置、客付の方疊の丸目を見る様に置也、左の方に風爐を置、風爐の左の鑽付と臺子の柱と見通し申様に置也、又釜の蓋柱際に置候て見合する也、釜の蓋大小により申也、口傳右の方水指を置、是も柱と水さしの脇とを見通す、臺子の眞中向柄杓立に唐金の火箸柄杓と立添て置、柄杓立の底には濡紙を敷、是は差引にならぬ様にとの事也、柄杓立の前に水覆を置、覆の内に蓋置を入置也、是を隠架と云也、右の通臺子に水指柄杓立、水覆、風爐を置合、とくと見合、片ひづみ無之様に置合する事第一也、金風爐の鑽水指の左右上ゲ下ル也、是は筥蒙釜の會釋也、

一上の架には茄子の茶入袋に入、天目袋に入、組長緒也、兩種を長盆の左右に置、臺子の眞中に置也、昔より臺子には唐物茄子の茶入を用也、天目臺共に名物也、茶入は右の方、臺天目は左に莊なり、

一床には掛物と花生と、臺子上下の莊五種と、以上七種也、是を眞の七莊と云也、總じて釜は、風爐共、に道具の數にいれず、一座の亭主と定て珠光よりの法也、釜を數に入る事、效なき故也、

〔長閑堂記〕一大坂にて秀吉公を桑山法印御成し給ひし時、道庵來て臺子を飾り置れしを、さつま